

平成21年3月31日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520598

研究課題名 古墳時代武装の変遷にみる儀仗的武装の基礎的研究

研究課題名（英文） A basic study on the courtesy arming through transitions of the arming in the Kofun period

研究代表者 水野 敏典

奈良県立橿原考古学研究所 埋蔵文化財部 主任研究員  
20301004

## 研究成果の概要：

古墳時代の武器・武具の変遷に対して、実用的側面と非実用的な儀仗的な側面の二面性を確認した。武器・武具の形態には、機能的向上とは直結しない短期的特徴がしばしば見られ、そこに儀仗的な要素が見出せた。

その中で、鉄鏃については古墳時代を通しての編年を作製し、並行する資料を整理し、対外交渉による新型式の導入と、新しい鉄器製作技術の使用こそが、東アジアで突出した型式数を生み出し、目まぐるしい変遷の原動力であることを確認した。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,100,000	0	1,100,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	540,000	3,440,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：武装 古墳時代 鉄鏃 儀仗的武装

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 武器・武具の研究は甲、冑、刀など個別に進められ、成果を挙げつつある。しかし、一個人の武装という視点で、個別研究を統合する視点に欠けており、研究を統合する必要性に迫られていた。

(2) 従来の武器・武具研究の多くは、研究対象が基本的に実用的なものであり、新型式はより機能的に向上したものであるという暗黙の仮定の上で研究が進められていた。そのため、形態変遷の過程は追っても、その変遷

の意味をあえて追求することはなかった。武器・武具における儀仗的な側面についての研究は一部に指摘があったものの、ともすれば二律背反的に、儀仗性をもつものは非実用品とみる傾向が強かった。そのなかで、武器・武具に実用性と儀仗性の二面性を認め、形態変遷に儀仗的な要素がどのように関わっているのかなどの視点を持つ具体的研究は進められていなかった。

(3) 古墳時代前期古墳の編年的研究は、未完成であり、伝世の可能性の強い銅鏡研究に頼

っているのが現状である。そのため、武器・武具を含めた多方面からの編年研究の必要性があった。これは古墳時代の開始を考える上でも必要であった。古墳とは何かを問い直す上で、弥生時代終末から古墳時代初頭の全国的な相対年代の整理は不可欠である。前方後円墳にみられる埋葬施設、副葬品構成、葺石、特殊器台と埴輪など、従来以上の精度で個別要素の出現時期を検証する必要性に迫られていた。

#### (4) 自らの研究の実施状況

① 本研究の相対年代を整理するための基盤をなす鉄鏃編年研究を進めていた。既に、古墳時代中期・後期の鉄鏃編年については、既に幾つかの論文を発表しており、一定の完成をみていた。相対年代観の構築の準備は整いつつあった。しかし、古墳時代全体を見通すための個別研究を統合する視点に欠けており、弥生時代から古墳時代を見通した型式分類、名称などの検討の必要性があった。

② 武器・武具による編年研究の応用を研究していた。編年は単なる相対年代観を提示するだけのものではない。各地出土資料の情報を集めることで、同時期の遠隔地域間の交流を見出す方法として、鉄鏃型式の分布の偏りを地域性として認識する視点を得ており、その論文を既に発表していた。そのことで、中央対地方という単なる中央集権論に陥ることなく、地方対地方の地域間交流や、地方と朝鮮半島、中国東北部などのとの対外的な型式の交流など、多様な交流の在り方について、地域性を用いた研究に大きな可能性があることを認識していた。具体的には古墳時代中期の古墳出土資料と朝鮮半島南部の伽耶地域の鉄鏃の並行関係についての論文を発表していた。

③ 古墳時代前期の研究が大きく欠落していた。しかし前期古墳の研究は具体的な編年表という形こそまだとっていなかったが、『畿内政権成立前後における武装の復元的研究』科学研究費補助金(若手研究B)2003~2005年において、基礎となる資料調査を進めていた。そのため、一部資料の収集と分類を行っており、併せて奈良県箸墓古墳に近接する纏向遺跡内のホケノ山古墳の調査に参加し、木槨系の埋葬施設と副葬品についての資料に触れる機会を得た。よって、前期古墳資料の編年の準備は整いつつあった。

以上の研究の積み上げの上に本研究計画があり、一定の成果を得られる見通しがあった。

## 2. 研究の目的

(1) 一人の人間が装着する武装形態を念頭におき、これまでなされてきた個々の武器・武具研究を統合することにある。個々の冑や、刀装具の研究は時期や型式を限定して細分

されており、一定の成果を挙げてはいる。しかし、それだけでは、古墳時代の武装、さらに集団としての軍事組織を論じるには不十分である。武器・武具の研究には、本来一人の武装という概念が欠けている。結果として武器・武具の組み合わせを把握し、その保有状況を検討するための生産供給体制についての分析が進められておらず、その部分の研究を進めることが目的の一つである。ともすれば古墳への副葬量が直接当時の社会の保有量を反映する議論へと直結しがちであったが、出土数と保有、生産量についての議論は一度切り離して考える必要がある。

(2) 武器・武具に儀仗的側面と実用的側面の二面性の二面性についての分析を行う。

ほぼ全ての資料が古墳副葬品であるにもかかわらず、ほとんどの場合はこれを実用品であり、機能的な向上を暗黙の前提として変遷が理解されてきた。そのため実際には儀仗的な側面が極めて強い製品も少なからず含まれる可能性は考慮されてこなかった。個々の武器・武具の型式変遷においてその意義や背景を考えていく。

## 3. 研究の方法

### (1) 相対的時間軸の設定

① 研究基盤となる古墳時代を通しての相対年代観確立のための鉄鏃編年の作成を行う。鉄鏃は非常に普遍的な副葬品であり、武装の基盤をなす資料であり、他の武器・武具の相対年代を評価する基準となる。

### ② 地域性の抽出

資料収集のなかで、型式分布の偏りや遠隔地域間での共通型式を見出す。研究の基盤をなす武器・武具による相対年代観が確立していることが前提となるが、これにより地域間の交流の粗密が分析可能である。これは単に中央と地方という単純なタテ関係だけでなく、地方と地方というヨコ関係とともに、中心点をもたない対外的な交流にも拡大可能である。

### (2) 儀仗的要素の抽出方法の確立。

① 編年作成作業において型式組列の断絶に注目する。型式組列の断絶と型式変遷の方向性の評価を行うことで、継続的な必要性(機能的側面)のない型式的特徴を見出す。実戦における必要性は、それを取り巻く環境が変化しない限り有効である。例えば深く鋭い腸挟は、一見機能的ともみえるが、次の段階では腸挟は浅くなり、容易に形骸化が進む。この時、深く鋭い腸挟は必ずしも継続的に必要とされなかったとして、形を重視した結果として儀仗的な側面が強いと考える。

### ② 武器・武具類の変遷とその終焉

①の考え方を普遍化すると前期の銅鏃、中期の短甲、剣、有機質の置き盾など多くの武器・武具が姿を消しており、その終焉を取り巻く状況を一人の武装という視点で確認

することで、儀仗的な側面の評価を行う。

### (3)基礎資料の収集

編年研究と地域性の分析を支えるだけの資料の収集を行う。資料の収集精度が分析の精度に直結するとともに、基盤となる相対的な時間軸の検証を行う。

## 4. 研究成果

### (1)研究の主な成果

①鉄鏃編年 個別に発表してきた従来の個別地域や中期・後期の鉄鏃編年を統合し、さらに研究の進んでいなかった古墳時代前期の編年をすすめた。これに際しては、古墳時代を通じての鉄鏃型式の分類、名称の整理が不可欠であり、併せてその整理を行った。鉄鏃研究が始まって既に70年以上が経過したが、古墳時代鉄鏃編年は一覧できる系統図として作製されたことがなかったが、これを作製した。特に古墳時代前期については、伝世の可能性の高い銅鏡を用いた古墳編年が主流であるが、鉄鏃による単純な型式変遷観を示すことで、前期古墳編年の精度を高めた。

②古墳時代開始画期 古墳時代前期の鉄鏃研究の一環の中で、古墳時代開始論を展開した。一つは、製作技術の変遷からであり、板状素材から厚みのある鉄素材を経ての、全面鍛造による鉄鏃の出現が一つの画期としてある。柳葉式、定角式、鑿頭式をはじめとして他にも鏃身側面に鍛造の面をもつ形態の出現が技術論的な画期である。これと併せて、特殊器台を出土する墳墓の副葬品構成および墳形の変遷を整理する中で、古相と捉えた鉄鏃型式の出現が宮山型特殊器台をもつ墳墓にほぼ並行することを把握し、これをもって他のホケノ山古墳、園部黒田古墳、神門3号墳などの弥生時代終末から古墳時代初めに評価の分かれる墳墓に視野を拡大し、整理を行った。そのなかで、吉備や近畿における銅鏡の副葬開始とともに、直刀、剣や鉄鏃などの鉄製武器、そして鉄製工具が組み合わせられた副葬品構成が出現するのが、古相とした従来と製作技法が異なる鉄鏃の出現時期と一致した。さらに、前方部をもつ前方後円墳形墳丘の出現時期とも整合し、前方後円墳出現の大きな画期をなすことを把握した。現段階での理解は、前方後円形の墳丘も、副葬品のセットも新型の鉄鏃も、一連の古墳祭祀として創出されたものと考えられる。

③儀仗的要素の抽出方法の確立 本研究の主題である武器・武具の儀仗的評価はともすれば恣意的なものになりがちである。そこで儀仗的要素の抽出方法として鉄鏃編年の型式組列の消長を用いる。つまり、実用的な要素は出現後その必要性がある限り継続するが、非実用(儀仗)的要素は、継続性が低い。鉄鏃編年を作製する過程で、深く鋭い腸袂などの特徴が次の時期に一気に浅く形骸化する

場合が、多くの型式組列で確認できた。また、二段関や茎部の振りなど出現当初から殺傷力に重点を置いた機能性の向上とは無関係な形態も多く、これらも存続時期は極めて限定されており、実戦における必要性から生み出された形態でないことがわかる。鉄鏃編年における型式組列を用いて、個別要素の継続性をもって儀仗性の抽出をはかる方法を考えた。

④鉄器製作技術の整理 鉄鏃の編年は形態分類を基本としているが、その前提として鉄鏃の製作技術を整理した。前期の厚みのある素材を経ての全面鍛造整形と鏃身の研磨技法。棒状素材を経た有頸鏃群の製作技法。複雑な切断技法を用いる短茎鏃の製作技法。平根系の板状素材と棒状素材を鍛接する技法、棒状素材から鏃身をつぶすように鍛造する方法などの整理を行い、編年との対応関係を確認した。

### (2)得られた成果の国内外の位置づけ。

①対外交渉の新たな視点 従来、対外交渉を示す遺物は銅鏡や土器など限定されていたが、それに鉄鏃を加えることができた。日本列島の鉄鏃変遷は、朝鮮半島および中国東北部の鉄鏃変遷と連動しており、当時の対外交渉と密接に関わっている。古墳時代前期の鉄鏃は朝鮮半島のもので大きく異なり、むしろその製作技術は中国の銅鏃などと近く、日本の骨鏃や木鏃を金属に置き換えたものと考えられる。中期に入ると朝鮮半島南部伽耶地域の短頸鏃が日本にも導入される。その一方で日本的な片刃箭式、短茎鏃などが半島南部に点的に出土するようになる。なお、短茎鏃は燕などの中国東北部にみられた鏃であり、馬具などから燕との関係が認められる。

また、中期半ばには長頸鏃が導入されるが、同時期に長頸鏃を使用していたのは高句麗のみであり、高句麗南下に伴う戦闘も含めた接触により、伽耶および日本においてほぼ同時に同様の長頸鏃が導入される。なお、この長頸鏃は高句麗とは形態が異なり、独自の形態である。後期になり伽耶地域と鉄鏃変遷は異なっていき、鉄鏃にみる対外交渉は下火となる。後期後半になると棘状関が広く日本の長頸鏃に導入されるが、棘状関の導入は朝鮮半島南部にはまとまって確認できず、半島北部の高句麗にほぼ同一のものが確認できた。つまり、後期後半に高句麗との修好関係が修復され、再度高句麗タイプの鉄鏃が導入されたと考えられる。

②広域編年 中国東北部、朝鮮半島を視野に入れた広域の資料を集成することで、日本出土品と同型式のものが存在することが確認できる。その型式組列としてそれぞれの地域の鉄鏃変遷の中で位置づけることで、朝鮮半島南部と日本列島出土鉄鏃の変遷をまとめることができた。東アジア的な視野の中で相

対的な時間軸を得ることができる。

③古墳時代を通しての時間軸の設定問題は、土器以外になされたことはない。複数の時間軸の設定は必須である。特に前期で大きな意味を持つ。前期の古墳の編年観はいまだ定まっておらず、前期鉄鏃編年の確立は古墳研究に大きな意味を持つ。

④科研報告書として『古墳時代鉄鏃の変遷にみる儀仗的武装の基礎的研究』をまとめた。科研成果の一部として個別に発表していたものを一つの論考としてまとめ直したもので、科研成果の公開と普及を目指した。

### (3)研究の展望

①広域編年による拡大 すでに、日本列島内だけではなく、朝鮮半島南部までは古墳時代を通じての鉄鏃編年が大枠として完成した。さらに周辺地域の鉄鏃型式との連動から、半島北部や中国東北部を含む東アジアを視野に入れた広域編年の作製が可能である。これは土器や馬具などで緩やかな形で行われていたことであるが、鉄鏃ではより明確な形で広域編年を組むことが可能であり、これからの大きな可能性を秘めている。これは鉄鏃に限定されたことではなく、馬具、甲冑研究における広域編年の基礎となる。

②儀仗性による副葬品の解釈 古墳時代の武器・武具の資料のほぼ全ては古墳の副葬品である。これまで武器・武具研究の多くについては実用品であることを前提としていたが、そこに儀仗的な側面を見出すことで、その型式変遷の原動力を武器・武具としての機能性向上に限定する必要がなくなった。より自由に型式変遷を捉えることができる。鉄鏃においては、型式の変遷は当時の対外交渉を元に最新技術を使用することに重点が置かれ、必ずしも殺傷力向上につながらない型式も多い。対外的にも日本列島の鉄鏃型式は飛びぬけて型式数が多く、変遷も複雑であり、その多くは儀仗的な側面が強いとみられる。鏃身形態が多様である反面、本来飛翔力の源である弓は弥生時代から長弓であり、合わせ弓や短弓の導入は確認できず、機能的な向上はほとんどみられない。その点から、軍事組織論などへの直接的な展開は難しくなったが、葬祭のセットとして宗教的な意味を捉えなおす必要が強くなった。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

水野敏典「古墳時代鉄鏃研究の諸問題—東アジアの中の鉄鏃様式の展開—」『古代武器研究』vol.8 古代武器研究会 2008 査読無

[学会発表] (計 4 件)

水野敏典「鉄鏃にみる日韓古墳時代の年代観」『歴博国際研究集会 日韓古墳時代の年代観』2006. 11 主催国立歴史民族博物館・韓国国立釜山大学校博物館

水野敏典「古墳時代鉄鏃研究の諸問題」第 8 回古代武器研究会 2007. 01. 13 滋賀県立大学

水野敏典「ホケノ山古墳 副葬品とその出土状況」第 352 回橿原考古学研究所研究集会 奈良県立橿原考古学研究所 2008. 3. 01

水野敏典「鉄鏃の製作技術にみる生産の実像」『大谷大学公開講座古墳出土品がうつし出す工房の風景』大阪大谷大学 2008. 12. 13

[図書] (計 4 件)

共著 水野敏典「特殊器台出土墳墓にみる副葬品構成の変化と初期畿内政権」『王権と武器と信仰』同成社 2008. 3. 9

共著 水野敏典「古墳時代前期柳葉式鉄鏃の系譜」『橿原考古学研究所論集第 15』八木書店 2008. 09 173～191 頁

共著 水野敏典「前方後円墳出現前後の副葬品構成と鉄鏃 —副葬品からみたホケノ山古墳の検討—」『橿原考古学研究所研究成果第 10 集 ホケノ山古墳の研究』2008. 11 227～238 頁

水野敏典『古墳時代鉄鏃変遷にみる儀仗的武装の基礎的研究』基盤研究 C 課題番号 18520598 科研研究成果 2009. 3

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

水野敏典

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

